

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！ (125)

—人口減少は未来の希望？—

死因の人類史

アンドリュー・ドイグ 著

草思社 税込定価4180円 2024年2月刊行

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトのブックガイドです。第125回目の本のタイトルはずばり「死因の人類史」。ヒトが死ぬ原因が時代とともにどうかわってきたのか？そしてこの先どうなるのか？まさに保険医学にぴったりです。人類史にともなう死因の変遷、そしてそれがもたらした寿命の延長、その結果としての少子化・・・そうした大きな流れをじっくりと読み解きます。

第1部：死因と寿命—そもそも死を記録としてカウントできるようになったのはロンドンペストあたりから。感染防御のためにペストで死んだ人間の数を数え始めたらしくそれが死亡表の起源になりました。

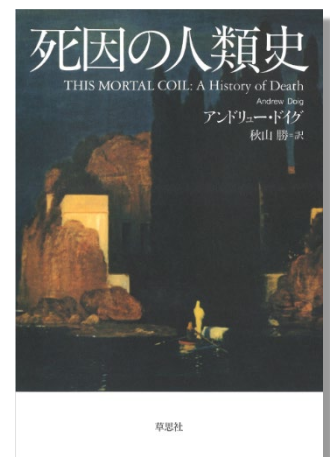
次の転機は1662年ジョン・グラントが死因別の生命表（かなり現代の生命表に近い）ものを作り出し、人口統計学や保険数理学の創始者となる。さらに1893年になって死因の分類が国際統一されていわゆる「国際疾病分類（ICD）」となっていきます。

寿命に関しては、19-20世紀の科学発展により疾病の治療や栄養状態の改善を国内に確立できた地域がどんどん寿命が延びはじめ、特に乳幼児死亡率の低下のため出生率が急減していく（人口転換）。この人口転換の最先端に日本があり、少子高齢化は寿命に関して先進的であることの裏返しですね。

第2部：感染症・・・農業が始まり集住したことや野生動物の家畜化により動物由来の感染症が爆発的に広がり多くの文明が崩壊していきます。ローマ帝国に始まり多くの巨大国家の衰退と滅亡は歴史的には敵との抗争が原因とされていますが、その根底には感染症による疲弊が必ず存在しました。興味深かったのは種痘を確立したジェンナーが英国政府から7億円もの報奨金を得ていたことですね。

第3部：栄養・・・人口は飢饉が起こるまで増えます。飢饉の原因は、凶作・自然災害だったのですが新大陸発見以後はジャガイモやトウモロコシなどが栽培されるようになり自然体での人口増→食糧不足→飢餓→死というプロセスはほとんどなくなり（マルサスの誤算）、多くの飢餓は食料があっても変えない貧困、戦争や革命などによる食料流通の途絶などが原因でおこるようになりました（ガザがその例）。

カロリーだけではなく、ビタミン類による死、特に壊血病と脚気。壊血病の治療から生まれた Randomized Control Study など興味深い。20世紀後半からは逆に栄養の過多＝肥満が寿命に関わってくる。サーチュイン遺伝子が示すように軽い飢餓状態が長寿をもたらすことも明らかになっていきます。



第4部：遺伝・・・ハンチントン病をはじめとして歴史的にも興味深いエピソード満載なのが遺伝病のセクション。世界には特殊な婚姻制度をもつコミュニティがまだまだあって、そこに遺伝子異常が発生すると集団全体に遺伝病が広がるという例がたくさん記録されています。ベネズエラ奥地のハンチントン病だらけの部族、近親婚を繰り返すモルモン教徒の集団、いとこ婚が一般的なアラブ人。フランス系カナダ人の多くがルイ14世が送り込んだ800人の女性の子孫で、アンジェリーナ・ジョリー、ヒラリー・クリントン、マドンナもこの「国王の娘たち」の子孫らしい。とにかくこの章はおもしろい。

第5部：行為・・・殺人、殺戮、処刑、自殺。アルコール依存と薬物依存。タバコを中心とした有害物質。交通事故・・・人間の行為の結果としてもたらされる死にもいろいろあるなあ。

第6部：結び・・・狩猟中心の事故死の時代から農業による集住がもたらした感染症の時代、感染症の克服による生活習慣病の時代と死因も移り変わってきました。それにつれて、人類は長寿となり、多くの国がこの100年の間に人口転換を迎えて高齢少子化により人口減少に転じています。現在起こっている地球の環境破壊は人口転換前半の急速な人口増加によりもたらされたわけですが、人口転換後半には人口減少がすすんで地球と人類が調和して安定的に保たれる未来が近いのかも。もちろんその人口減少の先に何が起こるのか、快適な人口規模が維持される「縮小均衡した世界」なのか、人類が減少して滅亡に向かうのか・・・あるいは、突発的な核戦争で・・・（元査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2024年6月）